

## 審査結果の要旨

氏名 奥村 隆

本論文は、ドイツ出身の社会学者ノルベルト・エリアスの人と業績を対象にして、かれが生涯をかけて取り組んだ文明化と暴力をめぐる社会理論の形成過程、内容、意義、および限界を論じたものである。全体は序章と5つの章からなり、序章では、1970年代まで忘れられていたこの社会学者が、ナチズムによって両親を殺された経験を持つことなどにふれつつ、問題意識を詳述している。

そのうえで第1章では、初期の文明化研究を取り上げ、エリアスのいう文明化とは、人びとが礼儀作法を身につけることによって自己を抑制し、「閉ざされた人間 *homo clausus*」となることによって、社会全体に拡散していた暴力を国家に集中していく過程であったことを述べる。その過程の典型的な事例は、「宮廷社会」を発達させた革命前のフランスで、貴族から市民層へとこの過程が普及していくことによって、文明 *civilisation* を重んずる社会ができていったのであるという。

奥村は、エリアスがこの研究でとくに、社会を個人対社会という構図から見るのではなく、人と人とが相互に依存しあう関係体 *Figuration* として見ていることを重視し、第2章で、それが、新カント派出身のカッシーラーや精神分析のフロイトなどの影響であったことを指摘しつつ、マックス・ウェーバーの方法論的個人主義では得られない利点をもつとともに、逆にウェーバーの強調した理念の力や、フーコーが明らかにした監視と強制のメカニズムなどを把握できない弱点をもつことを指摘している。

また、第3章では、エリアスの戦後の研究を扱い、かれが他の研究者と共同で、戦後のヨーロッパ社会では礼儀や性規範のインフォーマル化が進み、それを前提にした新しい自己抑制や民主化が問題となってきたこと、またとくにイギリスでは、暴力の捌け口がスポーツに求められ、フリーガニズムのような現象が発生してきたこと、などを明らかにした経過を述べ、これらがいわば脱文明化の研究の意味をもつことを指摘している。

さらに第4章は、文明にたいして文化 *Kultur* に誇りをかけてきたドイツ人にかんする、エリアスの研究の検討である。奥村によると、エリアスは、ナチズムや1960年代以降のテロリズムに現れたドイツ人の暴力を、フランスとは異なって貴族から市民層への文明化の伝播がおこなわれず、かといってイギリスのように葛藤の場としての議会制も形成されなかったドイツでの、人びとの、傷つきやすいがゆえにかえって理想主義に走りやすい自己意識とナショナリズムに起因するものと見なした。エリアスは、この研究をつうじて、文明化の理論でドイツ人固有の暴力をも説明できることを示したのであるという。

以上をふまえて第5章では、晩年のエリアスが、人間社会の暴力の克服を、人びとが、参加しつつ互いに距離を取り合い、力よりもシンボルで、すなわち暴力よりも知識で、問題を解決するようになる長期の過程と見なしていたことを指摘している。奥村によれば、エリアスは、高度に文明化が進んだ社会に生きているつもりなのれわれは、まだ「後期の野蛮人」にすぎず、社会という関係態と人びとのふるまいや自己意識を暴力から解放するには、まだまだ多くの時間と努力が必要と考えていたのであるという。

以上のように本論文は、社会学者エリアスの業績、およびそれに関連したり、比較の対象になる社会学者の業績などを丹念に読み、文明化と暴力の社会理論の現代における意義を検討した密度の高い、独創的な業績である。エリアスを対象にしたこのように包括的な研究は、日本ではもとより世界でもまだ数少ないので、本論文は、日本社会学にたいしてばかりでなく世界の社会学にたいしても、きわめて有意義な貢献といえる。

よって審査委員会は、本論文が博士(社会学)の学位を授与するに値するものと判定する。